

2011年11月26日(土)

第3回 村上春樹と阪神間の音楽文化

講師：土居 豊

『西宮文学案内・秋季講座』第三回『村上春樹と阪神間の音楽文化』

2011年11月26日

作家・文芸レクチャー

土居豊

【はじめに～講演の意図】

今回は、村上春樹が育った阪神間の、当時最先端だった音楽文化を通じて、のちの作家・村上春樹にいたる芸術的／精神的土壌について考察します。

西宮市は、知る人ぞ知る、村上春樹が少年期を過ごした街です。のちの作家・村上春樹がその精神を培った少年期に、西宮という阪神間の中心地で送った生活は、春樹文学の底流として作品に影響を与え続けていると考えられます。

今回の講演では、「春樹文学が作者の聴いて育った音楽からどのような影響を受けているか」に焦点をあて、春樹作品の原点に迫ります。

同時に、世界的な作家・村上春樹を育てた阪神間には、明治以来、日本の最先端の音楽文化があったこと、その伝統が、春樹少年の音楽的素養のベースにあったことを論じます。

【講演内容】

1. 村上春樹を音楽で読み解く～春樹文学と、音楽の影響を考察する

《春樹作品における音楽と小説のコラボ～『1Q84』や『海辺のカフカ』でヒットしたクラシック》

チェコの作曲家ヤナーチェクは、日本のクラシック愛好家の中でも、ファンの多い人気作曲家とはとてもいえません。

その代表作の一つ『シンフォニエッタ』は、金管楽器が華麗な活躍ぶりを聴かせるところから、吹奏楽アレンジもありますが、クラシックの中でメジャーな楽曲とはとてもいえません。

そのきわめてマイナーなクラシックのオーケストラ曲のCDが、ある日突然売れだしたら、事情を知らないCD会社の人が驚くのも当然です。もともと少なかった在庫は、たちどころに底をつき、再プレスまでにはかなり時間がかかったそうです。

その間に、ようやく事情がわかって、おそらくCD会社の人は、数年前の似たような現象を思い出したのではないのでしょうか。

そのときもやはり、小説の中で描かれたクラシック曲のCDが、突如売れ出したのでした。

それは、長編『海辺のカフカ』に登場するベートーヴェン作曲の『大公トリオ』のCDでした。

こちらは、同じベートーヴェンの交響曲『運命』や『第9』などとは比較にならないものの、クラシックの名曲の一つで、知名度は元々ありました。

けれど、それでもなお、この曲のCDが、CDショップの店頭で、店員の手書きポップ付きで、大々的に売られるというのは、予想外だったことでしょう。ベートーヴェンも天国でびっくり仰天しているのではないのでしょうか。

今思うと、手書きポップ付き『大公トリオ』CDの売り方に、今回の『シンフォニエッタ』騒動の予兆はあったのです。

そうして火がついた『シンフォニエッタ』フィーバーは、小説に出てくる演奏のCDだけでなく、これまで売れ残っていた他の録音のCDも、便乗販売されるほどの勢いをみせました。



↑CDショップ店頭では小説『1Q84』と「シンフォニエッタ」のCDがセット販売された

※その他の例～『ノルウェイの森』とビートルズ、『国境の南、太陽の西』とジャズ、など

2. 阪神間少年・春樹が聴いていた音楽

1) 全てを変えたアート・レイキーとジャズ・メッセンジャーズ神戸公演 (1964年1月)

[1964年まではアメリカのポップミュージックばかり聴いていました。ビーチボーイズとかね。なんで1964年までと憶えているのかというと、その年に、アート・レイキー&ジャズ・メッセンジャーズの来日コンサートを聴きに行き、ジャズにぶっ飛んだからです。フレディ・ハーバードのトランペット、ウェイン・ショーターのサクソ、シダー・ウォルトンのピアノ、そしてレイキーのドラム……とにかくさまざまだった。] (『余白のある音楽は聴き飽きない』村上春樹『雑文集』より)

[1961年1月にアート・レイキー率いるジャズ・メッセンジャーズというファンキー/ハード・バップ・スタイルの第一線のバンドが初来日した。あまりにも余波が広がったので、レイキーの来日は単なるコンサート・ツアーというより、ひとつの文化的「事件」と形容すべきだろう。(中略)

このコンサートを予期していたように、石原慎太郎は1955年8月号の『文学界』でジャズ・メッセンジャーズの「来朝」に触れている「ファンキー・ジャンプ」を発表したが、実際にレイキーの1961年のコンサートを自らの耳で聴いた文化人も何人かいた。たとえば、寺山修司がこのコンサートを聴いて、さっそく「ジャズっ子の詩学」というエッセイを書いたという。(『マイク・モラスキー『戦後日本のジャズ文化』より)

2) クラシックレコードの収集～自分でレコードプレーヤーを揃えてクラシックに開眼

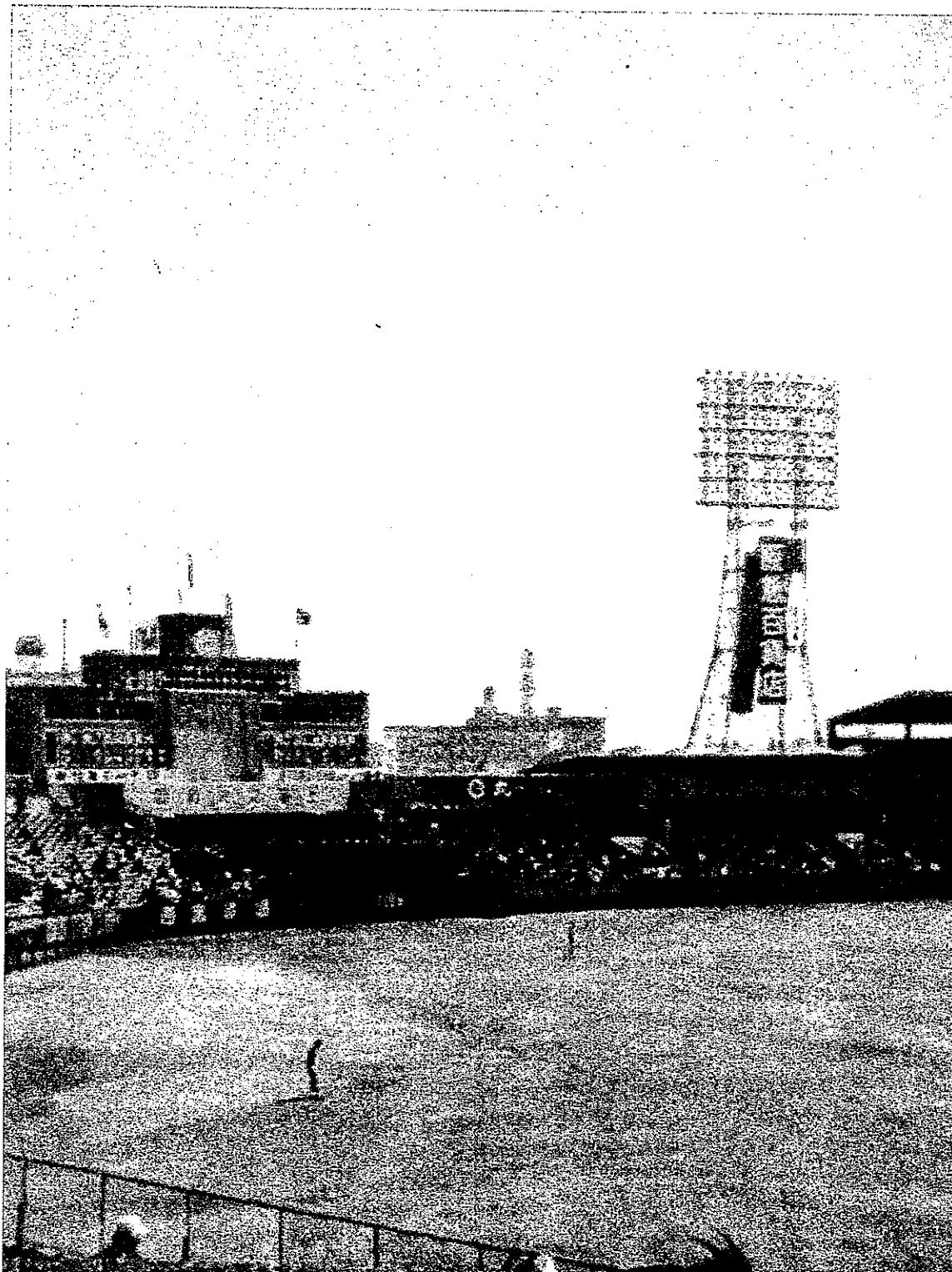
[僕の両親は音楽に対しては無趣味で、どちらかというと活字方面の人たちでした。ですから家にはレコードもオーディオ装置もなかった。小学校五年生のころにソニーの小さなトランジスターラジオを買ってもらって、それで音楽を聴き始めたんです。(中略)

高校生になるとポップスはラジオでたくさん聴けるからいいやって感じで、レコードを買うのはほとんどジャズとクラシックになっていきます。ジャズの新譜情報は、ジャズ喫茶やジャズ専門誌でキャッチしていました。クラシックは、神戸の三宮駅前に老夫婦がやっている「マスダ名曲堂」という渋い名前の小さなクラシック専門店があって、高校の帰りにそこに寄っておじさんと話をしながらレコードを買っていた。(『余白のある音楽は聴き飽きない』村上春樹『雑文集』より)

3) 阪神間、神戸でのライブ体験

※4 大ドラマー世紀の共演

[昔々西宮球場で「四大ドラマー世紀の対決」というのがあったけれど、うるささとしつこさではだいたいこれに匹敵するくらいの雷だった。] (村上春樹『遠い太鼓』より)



↑西宮球場は野球試合だけでなく文化イベントにも使われた

4) 阪神間における洋楽文化の伝統～大澤寿人と貴志康一



↑大澤寿人自作自演コンサートのポスター (※兵庫県立芸文センターでの展示会時に撮影)

・大澤寿人の場合
※ピアノ協奏曲第3番「神風協奏曲」

[ピアノ協奏曲第3番は1938年2月から5月にかけて作曲され、同年6月24日、大阪朝日新聞社会事業団が主催する「大澤寿人作曲指揮 愛国交響大演奏会」(於 大阪朝日会館)で初演された。指揮は作曲家、管弦楽は宝塚交響楽団、ピアノ独奏は当時日本に在住し、のちアメリカに渡った、白系ロシア人の名手でメトネル門下のマキシム・シャピロだった。ソリストに彼が登場したのは、総譜を読んだ新交響楽団の指揮者、ヨーゼフ・ローゼンシュトックが、このピアノ・パートを弾ける者は現在の日本ではシャピロしか居ないとして、彼を推薦したせいという。] (CD解説より)

・貴志康一の場合

※ベルリンフィル自作自演『日本組曲』より「道頓堀」

「貴志はこの間、ベルリンで指揮法の勉強と作曲をつづけていた。自宅への短信によると、彼は1933年6月1日、シェーネベルクの友人宅を借り、「ヴァイオリン協奏曲」を書いていたが、この頃からおそらく1934年ごろまでに、歌曲やヴァイオリン曲をはじめ、交響曲「仏陀」、交響組曲「日本組曲」、「日本スケッチ」、バレエ曲、「ヴァイオリン協奏曲」などを連続的に作曲した。短期間に、よくもこれほどの作品が書かれたものだと思う。また、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団を指揮して、ドイツ・テレフンケン・レコードに自作の管弦楽曲と管弦楽付歌曲を録音した。」(CD解説より)

3. 音楽小説としての春樹作品

《音楽タイトルと内容のコラボレーション〜ドビュッシーからビートルズ『ノルウェーの森』へ》

『ノルウェーの森』というビートルズナンバーは、ヒロイン・直子のテーマソングのように使われています。

直子が心を病んで京都の北山の山中にある療養所・阿美寮に入ってしまったあと、ワタナベははるばる東京から訪ねて行くのですが、そこで出会った直子のルームメイト、レイコさんが、直子のためにビートルズの『ノルウェーの森』をギターで弾きます。レイコさんによると、この曲は直子にとって特別な曲なので、この曲をリクエストしたときは100円出す約束なのだそうです。

直子自身は、ビートルズの『ノルウェーの森』について、こう語っています。

—引用—

《「この曲聴くと私ときどきすごく哀しくなることがあるの。どうしてだかはわからないけど、自分が暗い森の中で迷っているような気になるの」と直子はいった。「一人ぼっちで寒くて、そして暗くって、誰も助けに来てくれなくて。だから私がリクエストしない限り、彼女はこの曲を弾かないの」

(『ノルウェーの森』より)

ここを読んだだけでも、直子の心象と、この曲の内容がいかにマッチしているかが、わかるでしょう。

※その他の例〜『ねじまき鳥クロニクル』、『海辺のカフカ』、『1Q84』の場合